

双塔



新潟教会 2014年7月

No. 314

世に勝つ信仰

長尾山 令仁

(聖書キリスト教会会長 牧師東京神学校校長)

「世」というものについて、聖書はどのように見ているかということをもまず取りあげます。

聖書は、「世」とは、神に敵対する悪魔に支配されているものだと教えています。(エフェソ2章2節)ですから「世」とは神に敵対するものであって、世を愛することは、神に敵対することになるわけです(ヤコブ4章4節、ヨハネ2章15~17節)。私たちは案外、「世」というものを軽く考えていますが、神の目から見た「世」とは、神に敵対する存在であるということです。そうであるとすれば、この世の流れに流される生き方というのは、神に喜ばれる生き方であるとは言えません。

神に喜ばれる生き方をしようと思えば、この世の流れに抗した生き方をしなければならないことになります。たとえば、学校でみんながカンニングをしている時、多く人は「自分も同じようにしなければ損をする」と思って、自分もカンニングをしましょう。それがこの世の流れに流されている人の生き方です。そういう人は、社会に出て、職場ぐるみで悪いことをしている時、心ならずもそれに流されてしまいます。「ノー」を言うことができない人です。川の流れを見てみると、命のないものは皆流されていってしまいます。流れに抗して上流に向うのは、命のあるものだけです。それと同じで、霊的命のない人は、この世の流れに流されていってしまいます。しかし、霊的命の与えられているクリスチャンは流れに抗して立ち、生きることができるのです。この世の流れに流されず、神の御心に従って生きることができるためには霊的命が必要で、クリスチャンなら、それを頂いております。ですから、それが出来るのです。そうせよと教えられているのは、そのことに関係があります。(ローマ12章2節)

そういうわけで、クリスチャンは神の子としての命を与えられた者たちですから、この世の流れに流されず、この世に勝つことができるわけです。

「神から生まれた人は皆、世に打ち勝つからです。世に打ち勝つ勝利、それはわたしたちの信仰です。だれが世に打ち勝つか、イエスが神の子であると信じる者ではありませんか」 (1ヨハネ5章4~5節)。

クリスチャンには、皆「世に打ち勝つ信仰が与えられております。一生懸命になって努力することによって与えられるものではありません。すでに与えられているのです。

ですから、私たちが朝禱会で祈るのは、それが与えられることではなく、すでに与えられている者として、この世の流れに流されず、主の御心にかなった者として生きられるようにということです。「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにしておいて自分を変えて頂き、何が神の御心であるか、何が善いことで神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい」(ローマ12章2節)。

そして、祈らなければならない多くのこと、この世のこともそうですし、また神の国のこともそうですが、そういう祈りの課題を、すでにこの世に打ち勝った勝利者として祈るのです。そのことを自覚して祈ることは極めて大切です。それを自覚して祈る人の祈りには大きな力があります。

■復活節第6主日、江部神父様の銀祝 —— 5月25日(日) ——

世界広報の日でもあったこの日、前主任司祭の江部神父様が主任を務める東京都心のカトリック神田教会では、神父様の銀祝を祝う記念ミサと祝賀会が催された。侍者を務める子供たちに囲まれて、新潟教会では実際にささげられることがなかった歌ミサで行われた。説教では、ご自身の司祭職 25 年の歩みを振り返るように、「聖霊は、イエスの掟を守る者たちとともにいて、ともに働いてくださる」と話された。また、同じころ新潟教会では、司祭館で共同生活をされたナジ神父様がミサを司式。「東京では、ちょうど今、江部神父様の銀祝の記念ミサが行われています。心を合わせて祈りましょう」とミサを始められた。

■主の昇天、バザー —— 6月1日(日) ——

快晴の第一日曜日。復活されたイエス様が天にあげられたことを記念するミサが、ラウル神父様の司式で行われた。「嵐の日、船乗りは碇を海底に沈めて船を安定させる。キリスト者は苦難のとき、碇を天につなぎ、自らを安定させる」のお話には、参列者の中には自分に言い聞かせるかのように小さく頷く姿も。ミサ後は、センター1階で国際協力部主催による“インターナショナル・フレンドシップ・バザー”。新庄教会共同体を支援するために開かれ、T シャツや司教館提供の掘り出し物、季節の笹団子に手作りのマーマレードなど魅力満載。選ぶ人の目にはキラキラお星さまが…。喫茶コーナーも設けられ、賑やかな会場だった。

※長岡地区信徒大会でも、新庄教会支援のT シャツが販売され、好評を得た。

■聖霊降臨の主日、茶話会 ----- 6月8日(日) -----

聖霊降臨の主日で復活節が終わる。復活節中、祭壇に飾られた大きな蝋燭に明かりが灯され、赤い祭服のラウル神父様が献香する煙が、聖堂の開け放った窓から吹く風の中に消えていく。神父様は「聖霊降臨の日は、教会の誕生日である。教会は建物を指すのではなく、人々が集まっている所である」と話され、「様々な癖や性格の人が集まっているので、苦手な人もいるだろう」しかし「その一人一人に、必ず聖霊が働いていることを思い出して欲しい」と声を強めた。ミサ後は、センター2階で、総務部の人たちがセッティングの茶話会が開かれた。(総務部のみなさん、ありがとう!)
ワッフルにコーヒーが似合い、前週同様、楽しい歓談のひと時だった♪



《みんなの広場》



6月22日(日)9時半のミサ後、ラウル神父様の司式で『聖体賛美式』が行われた。そこで、『聖体賛美』について、チョット調べてみました。

聖体信心の慣習は、13世紀ころに広まったそうです。

ご聖体を容器に入れて示すことを聖体顕示といい、聖体のうちにおられるイエスを沈黙のうちに礼拝することを聖体礼拝と言います。

聖体賛美式では、公に行う聖体礼拝、司祭が聖体によって与える祝福、賛美の祈りで構成されています。奉持して行列することが聖体行列です。

※信仰年の昨年、「キリストの聖体の祭日」に、フランシスコ教皇様の呼びかけで、全世界のカテドラルで、ローマと同じ時間に行われた『聖体賛美式』は記憶に新しいですネ!